

4. 骨角牙器・貝輪 (第32図・図版7)

約550点ほどを取り上げ、内容は骨角牙器、貝製品および獣魚骨であるが製品は少ない。

装飾品 (1~4) ^{註15} 1はサメ歯製耳飾で、歯根部を研磨し、2小孔を穿つ。2・3は獣骨製の筭頭部片で、2は6条の沈線を刻む。3は2か所を挟り込んで頭部を作出。下方表裏に刻みを入れる。4は獣骨を半割して素材とし、頭部は挟り込んで作出し、孔を穿つ。また正面には高まりを残し、頂部に6か所刻みを入れる。下端部には1条の鈍い刻みをもつ。背面は平坦に研磨している。

釣針 (5~7, 11) 5・6・11は獣骨製で、5は略円形を呈する軸部。6は小形の単式釣針で無鏤である。頭部と針先端部を欠損。針部下縁に2か所の刻みをもつ。7は牙製でエナメル質を残している。体幹部は長方形をなし、先端部は削って三角形状をなしている。釣針か疑問を残すがこの類に含めておく。11は少し反りが認められ、先端部は研磨により鋭く作出。

刺突具 (8~10, 15~18, 20) 全て獣骨製である。体幹部が湾曲するもの (8~10) と、直線的なもの (15~18, 20) に分けられる。8は中程を狭く、先端部を長三角形状に研磨して作出したもので、基部を欠損する。9は側面と下縁を研磨により作出する。基部を欠損するがもう少し長くなろう。10もほぼ同巧である。15は茎をつけたような形状をなし、体幹は中膨らみを呈す。錐の可能性もある。16・17は体幹部を直線的に仕上げている。18はやや大きいもので体幹部は略三角形を呈す。20は先端および基部を欠損している。

へら状加工品 (19・21) 共に獣骨製。19は片方が薄く、他方を厚く研磨、整形している。21は厚みのある素材を研磨してへら状に整形したもので、網針等の破片か。

キズをもつ骨片 (13・14・22) いずれも獣骨で、13・22は擦痕状のキズを残し、また14は咬痕のようなキズを留めている。

不明加工品 (12) 牙製で頂部および近端部は研磨する。遠端部には緊縛した際に着いたのであろうか、横位の擦痕が無数に残っている。

その他 (23・24) ^{註16} 23はヤスを作出する際の残滓とされるもので、半分以上を磨りへらしている。24は海獣の脊椎骨と思われるもので擦痕や刃器状の工具で削り込んだ痕跡がある。

貝輪 (25) 貝製品はこれ1点のみである。サルボウ製で半分以上を欠損している。

出土地点は、1・3がB区V層、22がC区I層、5・12・15・18がC区II層、24がC区III層、25がC区IV層、20がD区I層、19・21がD区II層、他は表土層からの出土である。

註15 縄文後期の遺跡および層位からの出土が多い。

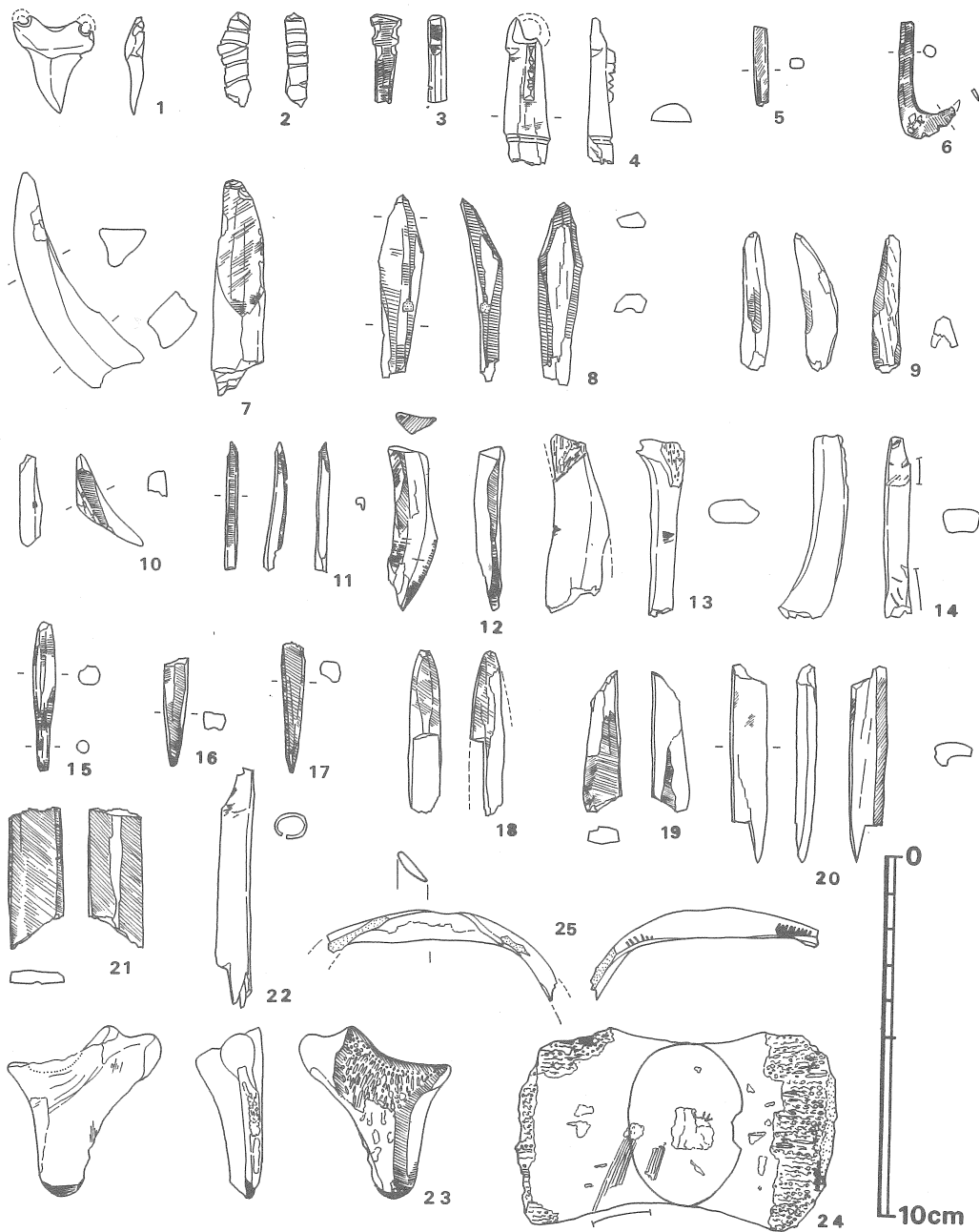
賀川光夫外 「宮下遺跡調査報告」 『長崎県文化財調査報告』 第7集・第9集 1968・1971

永井昌文・前川威洋外 『山鹿貝塚』 1972

永井昌文・木村幾多郎外 『新延貝塚』 1980

中島直幸外 「菜畑遺跡」 『唐津市文化財調査報告』 第5集 1982

16 前川威洋氏により注意・確認されたもので次の発見例がある。



第32圖 骨角牙器・貝輪(1 / 2)

5. 土製品 (第32図, 第10表, 図版7)

土製品は3種に大別できる。円盤状土製品, 有孔円盤, 不明土製品の3種で各々細別できる。

●円盤状土製品 (1~6) 土器片を利用したもので大形のもの (1・2) と小形のもの (3~6) がある。大形のものには土器の底部を再利用しており, 1には海獣脊椎骨(?)のスタンプが認められる。3は貝殻条痕文土器を利用したもの。外に小形品6点あり, 総数12点を数える。

●有孔円盤 (7~11) 孔がほぼ中央に穿たれたもの (7~9) と一方に片寄るもの (10・11) があり, 各々土器破片を利用。9は半欠であるが周縁は丸く成形・調整され下方に刻みを有す。11は貝殻条痕文土器を利用したもので孔が極端に片寄っている。周縁は未調整。前者は両方から丁寧に穿孔, 後者は表から穿ち裏面から僅かに整える程度のもので, 明瞭な差異を示す。

●不明土製品 (12~14) 12は円盤状をなすものと思われる。凹レンズ状を示し焼成前に周縁部を調整し, また孔を穿っている。3mmほどの小孔が現在3か所残存している。調整は内外面共にナデて仕上げる。13・14は相似た形状を示すもので, 胎土・焼成・色調も似ており, 対をなすものと考えられる。片面はササラ状のもので調整し, 他面は手捏ねである。底面はナデて仕上げる。色調は赤褐色を呈する。支脚もしくは, 脚台をなすものか。

第10表 土製品法量表

番号	層位	法量(mm)			重さ(g)	調整		滑石	色調	挿図番号	番号	層位	法量(mm)			重さ(g)	調整		滑石	色調	挿図番号
		長径	短径	厚さ		外面	内面						外面	内面	長径		短径	厚さ			
1	BIV	80	69	15	88	スタンプ	ナデ	含	茶褐	32-1	11	A I	31	28	7	8.5	?	?	無	赤褐	
2	BV	68	59	10	45	?	?	含	灰褐	32-2	12	B攪	41	34	10	16.5	ササラ	ナデ	無	暗褐	
3	EIII	55	47	7	25	貝殻	ササラ	無	黄橙	32-3	13	B攪	59	55	8	31	ササラ	ナデ	無	茶褐	32-7
4	D I	39	36	9	16	貝殻	貝殻	無	茶褐	32-4	14	E表	55	54	8	31	ササラ	ササラ	含	赤褐	32-8
5	BV	47	43	6	18	ササラ	ナデ	含	赤褐	32-5	15	B表	72	$\frac{59}{\pm}$	7	60	ササラ	ナデ	含	赤褐	32-9
6	D I	39	35	7	16	ナデ	ササラ	無	赤褐	32-6	16	E表	70	62	7	34	ナデ	ササラ	含	暗褐	32-10
7	D I	44	38	8	18	ミガキ	?	無	茶褐		17	B表	85	80	11	71	貝殻	ナデ	無	茶褐	32-11
8	E表	40	37	8	15	貝殻	貝殻	無	灰茶		18	C崩	$\frac{59}{\pm}$	$\frac{54}{\pm}$	10		手捏ね	手捏ね	含	暗褐	32-12
9	B攪	40	35	6.5	11.5	?	?	無	黄橙		19	C崩	71	40	31		ササラ	手捏ね	含	赤褐	32-13
10	E表	45	38	8	18	ミガキ	?	無	黄茶		20	C崩	53	42	37		ササラ	手捏ね	含	赤褐	32-14



第33図 土製品(1/3)

V 諫早市有喜貝塚出土の人骨

松下孝幸*

はじめに

諫早市松里町に所在する有喜貝塚は大正14年(1925年)に発掘調査が行われた(浜田, 他, 1926), 長崎県でも著名な遺跡であるが, 現在は宅地化が進み, 今日では発掘地点の正確な場所すら確定できない状況であり, 早急に現時点での考古学的調査と遺跡保存の対策を講じなければ, 早晩消滅してしまう危険性をはらんだ遺跡である。

1983年(昭和58年), 急傾斜地崩壊対策事業の一環として, 本貝塚の一部が工事にかかるため, 遺跡の一部の発掘調査が行なわれ, 人骨も少量であるが, 出土した。大正14年の発掘では3体の埋葬人骨が出土しており, その形質は宮本(1926)によって明らかにされている。今回出土した人骨はきわめて少量であったが, できるだけ詳細に観察や計測を行い, また改めて有喜人骨の特徴とその意義を考えてみた。

資 料

今回出土した人骨は, すべて散乱人骨であり, 埋葬人骨は存在しなかった。また, これらは大正14年に発掘された人骨の一部とも考えられるが, 幸い京都大学理学部自然人類学教室の池田次郎教授のご好意により, 人骨照合の機会を与您にいただき, 一部ではあるが, 人骨の所属を明確にすることができた。

計測方法は, Martin-Saller (1957) によった。

なお人骨の所属時代については, 大正15年報告(宮本, 1926)の3号人骨は出土遺物や後述する鼻根部の特徴から, 弥生時代以降の人骨と考えられるが, その他の人骨については縄文時代と弥生時代以降のどちらに属するものかは不明であり, 今回出土した人骨も大部分が時代を特定することができなかった。

なお, 今回出土した人骨片は表11のとおりである。

第11表 出土人骨片

骨名	数量	備考
頭蓋片	4点	前頭骨片1点, 頭頂骨片3点
下顎体骨片	1点	
肩甲骨片	1点	

*Takayuki Matsushita (長崎大学医学部解剖学第二教室)

(Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University)

尺骨片	2点	尺骨A-男性 尺骨B-女性
第3中手骨	1点	
大腿骨	4点	1号人骨～3号人骨のどれでもない。 大腿骨A, 大腿骨B, 大腿骨C, 大腿骨D
脛骨片	1点	
腓骨	3点	3号人骨(男性)の一部 腓骨A(両側)-女性
踵骨	1点	
舟状骨	1点	
第1中足骨	2点	第1中足骨A, 第1中足骨B
肋骨片	数点	

所 見

(1)頭蓋

前頭骨の小片1点, 頭頂骨の大片3点, 下顎骨の正中部および左側関節突起が残存していた。頭蓋片はいずれも厚く, 下顎体の高径は低いものである。大正14年発掘の3号人骨の頭蓋はほぼ完全なので, 頭蓋片は3号人骨のものではなく, また下顎片は3号人骨および2号人骨の一部ではない。

(2)四肢骨

1) 上肢骨

肩甲骨, 尺骨および中手骨のみで, 尺骨は右側と左側がそれぞれ1本ずつ発掘されたが, 大きさや形態から, 両者は別個体と考えられる。

1. 肩甲骨

左側の肩甲棘が残存していたにすぎない。大きさは中程度である。

2. 尺骨

①尺骨A

右側で, 径が大きい方をAとした。近位半が残存していた。中央位での計測はできないが, 径は小さいものではない。また滑車切痕は著しく浅い。径が大きいことから, 男性の尺骨と考えられる。3号人骨の尺骨は両側とも存在するので, 1号人骨の尺骨の可能性が強いが, 確証はない。

②尺骨B

骨体近位部が残存していたが, 肘頭を欠損している。径は小さいものである。径が小さいことから, 女性の尺骨と考えられる。2号人骨の可能性が考えられるが, これも確証はない。

3. 中手骨

左側第三中手骨が1本検出された。

2) 下肢骨

大腿骨, 脛骨, 腓骨, 踵骨, 舟状骨および中足骨が検出された。

1. 大腿骨

左側骨体近位部，左側骨体中央部，右側骨体後面の破片および左右不明の骨体片が検出された。これらは，京都大学保管のどの人骨の一部でもない。

①大腿骨 A

左側骨体近位部をAとした。骨質は堅牢で，緻密質は著しく厚く，髓腔は狭い。また骨体の径は小さいので，おそらく女性大腿骨と考えられる。計測は骨体上部の計測が可能で，骨体上横径は28mm，骨体上矢状径は21mmで，上骨体断面示数は75.00となり，platymerに属し，骨体上部は扁平である。

②大腿骨 B

左側骨体中央部をBとした。径が小さいので女性大腿骨と考えられる。計測値は，骨体中央矢状径が24mm，骨体中央横径が23mmで，骨体中央断面示数は104.35である。

③大腿骨 C

右側骨体の後面の破片である。粗線の発達が悪いようである。

④大腿骨 D

左右不明の骨体片をDとした。

2. 脛骨

左右不明の骨体前縁の破片が残存していたにすぎない。

3. 腓骨

右側の遠位端（外果）と左右の骨体中央部が残存していた。

①3号人骨腓骨

右側の遠位端（外果）は大正14年発掘の3号人骨の右側腓骨の断端と正確に接合できた。この部の径は大きい。

②腓骨 A

左右の骨体は大きさや形態からおそらく同一個体と考えられる。径はやや小さく，溝形成も著明でないので，女性腓骨と考えられる。2号人骨の可能性が考えられるが，2号人骨の四肢骨の骨質は薄いので，一応，これとは別個体と考えておきたい。

4. 踵骨

左側踵骨の上部が残存していた。

5. 舟状骨

右側舟状骨が残存していた。完全であり，径は大きい。

6. 第1中足骨

左側の第1中足骨が2本残存していた。

①第1中足骨 A

径が大きいのをAとした。完全で，径は大きい。

②第1中足骨B

径が小さいのをBとした。これも完全で、径は小さい。

考 察

今回出土した人骨片のうち、腓骨の一部は大正14年発掘の3号人骨のものと確認できたが、それ以外については明確ではない。今回出土した人骨については、特別考察を要する特徴は認められないが、大正14年発掘の人骨のうち、3号人骨については今日の形質人類学の成果をふまえて、多少検討しておきたい。

第12表 大正14年出土人骨

人骨番号	性別	年齢	葬位	備考
1号人骨	男性	熟年	屈葬	石棺外
2号人骨	女性	熟年	不明	石棺内
3号人骨	男性	熟年～老年	伸展	石棺外

表12のとおり、3体のうち、1体は石棺に埋葬されており、あとの2体は特別の埋葬施設をもたず、またこの2体は葬位を異にしている。3体の人骨のうち、保存状態が最も良好なものは3号人骨で、この人骨は大きく、また2号人骨の骨質は薄い。3号人骨は後述しているように、弥生時代人骨の可能性が最も強く、また興味ある特徴が認められるので、この人骨の頭蓋と推定身長値について、西北九州弥生人（内藤，1971）、二塚山弥生人（松下，1979）、三津弥生人（牛島，1954）と比較してみた。

表13に示すとおり、頭蓋最大長、頭蓋最大幅とともに、西北九州、二塚山および三津弥生人とあまり大差なく、従って頭蓋長幅示数もこれらの弥生人に近似しており、頭型は中頭型に属している。また頭蓋水平周、横弧長および正中矢状弧長もこれらの比較群とは基本的には大差



第34図 遺跡

第13表 脳頭蓋計測値 (mm)

		有喜貝塚 3号人骨 (宮本)	西北九州		二塚山		三津	
			弥生人 (内藤)		弥生人 (松下)		弥生人 (牛島)	
			n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	184	21 182.81	13 183.00	15 184.73			
8.	頭蓋最大幅	145	20 144.95	14 143.50	10 145.60			
17.	バジオン・プレグマ高	—	15 134.60	12 138.67	12 136.83			
8/1	頭蓋長幅示数	78.8	20 79.17	12 78.05	10 78.45			
17/1	頭蓋長高示数	—	15 74.15	11 76.02	11 74.18			
17/8	頭蓋幅高示数	—	14 93.11	11 97.42	9 94.89			
23.	頭蓋水平周	530	19 530.42	13 526.00	10 536.70			
24.	横弧長	324	15 324.67	15 314.07	11 321.27			
25.	正中矢状弧長	374	17 376.47	11 368.45	12 378.00			

ない。すなわち、脳頭蓋については、西北九州、二塚山および三津弥生人とほとんど変わるところは認められない。

次いで、顔面頭蓋について同様の比較を行ってみると(表14)、中顔幅は二塚山弥生人より小さく、西北九州および三津弥生人に近く、顔高および上顔高は三津弥生人よりもやや小さいが、西北九州弥生人よりも大きく、二塚山弥生人と大差ない。従って、ウイルヒョウの顔示数および上顔示数はともに三津弥生人よりもやや小さいが、西北九州弥生人よりも大きく、二塚山弥生人にきわめて近く、3号人骨には高上顔、高顔傾向が認められる。

眼窩幅は二塚山弥生人よりもわずかに小さく、西北九州および三津弥生人に近く、眼窩高は西北九州弥生人よりも大きく、二塚山および三津弥生人と大差ない。眼窩示数は西北九州弥生人よりも大きく、また二塚山および三津弥生人よりもわずかではあるが大きい。鼻幅および鼻高はともにどの比較資料よりも大きく、鼻示数は二塚山弥生人より大きい、西北九州弥生人よりも小さく、比較的三津弥生人に近い。すなわち、眼窩や鼻部においても高径が高いことがうかがえる。

側面角はどの側面角も比較資料のいずれよりも大きい。

第14表 顔面頭蓋計測値 (mm)

		有喜貝塚 3号人骨 (宮本)	西北九州 弥生人 (内藤)		二塚山 弥生人 (松下)		三津 弥生人 (牛島)	
			n	M	n	M	n	M
			45.	頬骨弓幅	—	12 138.42	5 144.20	6 142.41
46.	中顔幅	104	17 105.00	6 106.00	10 104.30			
47.	顔高	122	14 117.07	9 122.56	10 125.00			
48.	上顔高	71	17 68.06	10 71.60	13 74.54			
47/46	顔示数(V)	117.31	14 111.78	5 117.47	8 121.58			
48/46	上顔示数(V)	68.27	17 64.84	6 69.58	10 71.65			
51.	眼窩幅(左)	43	15 43.07	9 44.67	14 42.93			
52.	眼窩高(左)	36	15 32.80	12 36.08	13 35.25			
52/51	眼窩示数(左)	83.7	15 76.18	9 81.43	13 82.45			
54.	鼻幅	30	16 27.75	11 26.27	13 27.15			
55.	鼻高	57	16 51.00	11 55.18	14 53.00			
54/55	鼻示数	52.6	16 54.41	11 47.80	13 51.38			
72.	全側面角	87	15 82.00	9 84.44	11 82.55			
73.	鼻側面角	90	—	10 87.20	11 87.73			
74.	歯槽側面角	90	—	9 78.22	11 67.27			

次いで、大腿骨最大長からPearsonの公式を用いて、推定身長値を算出してみると、右側からは167.60cm、左側からは168.54cmとなり、かなり高身長である。右側からの推定身長値を頭蓋の場合と同じように比較してみると、表15のとおり、西北九州弥生人はもとより二塚山および三津弥生人の平均値よりも大きい。

このように、脳頭蓋については西北九州地域の弥生人と北部九州地域の弥生人とも何ら異なるものではないが、顔面頭蓋は明らかに高顔であり、推定身長も高く、いわゆる西北九州弥生人とは異なるものである。

第15表 推定身長値（男性，右大腿骨より，cm）

有喜3号人骨 (宮本)	西北九州弥生人 (内藤)		二塚山弥生人 (松下)		三津弥生人 (牛島)	
	n	M	n	M	n	M
	167.60	16	158.79	7	164.27	7

有喜貝塚が調査された時代には、西日本での縄文時代人骨の出土例もまだ少なく、弥生時代人骨に至っては皆無の状態であった。またこれらの人骨の所属時代も明確には確定できず、従ってこの人骨の位置づけを明確にすることができなかった。その後、九州大学の金関は九州および山口での弥生時代人骨の収集を精力的に進め、山口県の土井ヶ浜および佐賀県の三津弥生人骨を縄文時代人骨などと比較検討することによって、両弥生人に共通して認められる高顔、高身長という特徴は大陸からの渡来民との混血の結果生じたものと推論した。また長崎大学の内藤は、西北九州地域での古人骨の収集を行い、この地域の弥生人は低・広顔で、鼻根部には縄文人の特徴が認められ、また低身長であることを明らかにし、弥生時代人に地方差が存在することを指摘した。

その後も九州では弥生時代人骨の出土が続いており、現在のところ、九州北半地域においては、北部九州・山口県の西部地域には高顔、高身長の弥生人が、西北九州地域には低・広顔で、低身長の弥生人が存在することが明らかにされているが、そうするとこの有喜貝塚3号人骨の存在が問題となる。確かに計測値をみるかぎりではこの3号人骨はいわゆる西北九州地域の弥生人とは異なるものであるが、鼻根部の形態はどのようなものか以前から興味を持っていた。今回所見を書くにあたって、この人骨を実見したが、鼻根部は全く扁平であり、また鼻骨は狭く、縄文人の形態は全く認められないものであった。また下顎骨は大きい、下顎切痕は深く、上腕骨は細長く、三角筋粗面や大腿骨の粗線の発達も悪いものである。

3号人骨には鉄鏃が伴っていることや頭蓋、鎖骨、上腕骨、大腿骨の形状が現代日本人骨に類似している（宮本，1926）ことおよび鼻根部が扁平なことからこの人骨は縄文時代人骨とは考えられず、弥生時代以降の人骨と推定されるが、抜歯が認められることを考慮すれば、現時点では、弥生時代人骨の可能性が最も強く、もしこの人骨と類似の弥生時代人骨を周辺地域で求めるとすれば、現時点では佐賀平野の甕棺人骨以外にないであろう。

この3号人骨の形質の由来やその意義は、有明海沿岸地域の弥生時代人骨の特徴を明らかにする過程で、次第に解明されていくものと考えられる。西北九州地域にだけとどまらず、佐賀県や熊本県および鹿児島県の一部を含めた九州の西海岸地域の問題として捉えておく必要がある。

総 括

1. 諫早市松里町にある有喜貝塚の一部の発掘調査が1983年（昭和58年）に行われ、散乱人骨が出土した。
2. 今回出土したものの中には大正14年出土の3号人骨の一部が含まれていた。
3. その他の骨については、所属や時代を決定することができなかった。

第16表 尺骨計測値 (mm)

		尺骨 A	
		右	
6.	尺骨頭幅	22	
6(1)	上 幅	30	
7.	尺骨頭深	21	
7(1).	尺骨頭鈎状突起間距離	20	
8.	尺骨頭高	22	
9.	鈎状突起橈骨側関節面前幅	7	
10.	鈎状突起橈骨側関節面後幅	13	

第17表 大腿骨主要計測値 (mm)

		A		B	
		女性		女性	
		左		左	
6.	骨体中央矢状径	—		24	
7.	骨体中央横径	—		23	
8.	骨体中央周	—		74	
9.	骨体上矢状径	28		—	
10.	骨体上横径	21		—	
6/7	骨体中央断面示数	—		104.35	
10/9	骨体上断面示数	75.00		—	

第18表 腓骨計測値 (mm)

		腓骨 A	
		女性	
		右	左
1.	最大長	—	—
2.	中央最大径	14	13
3.	中央最小径	10	10
4.	中央周	40	40
4 a.	最小周	—	—
3/2	中央断面示数	71.43	76.92

◀ 摺筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた、諫早市教育委員会社会教育課、人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。▶

参 考 文 献

1. 浜田耕作, 小牧実繁, 島田貞彦, 1926: 肥前国有喜貝塚発掘報告 (上)。人類学雑誌, 41: 1—14.
2. 浜田耕作, 小牧実繁, 島田貞彦, 1926: 肥前国有喜貝塚発掘報告 (下)。人類学雑誌, 41: 79—93.
3. 金関丈夫, 1955: 弥生人種の問題。日本考古学講座, 4: 238—252.
4. 金関丈夫, 1959: 弥生時代の日本人。日本の医学—第15回日本医学会総会学術集会記録一, 1: 167—174.
5. 金関丈夫, 永井昌文, 佐野 一, 1960: 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について。人類学研究, 7: 1—36.
6. 金関丈夫, 1966: 弥生時代人。日本の考古学, 3: 460—471
7. 松下孝幸, 1979: 二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山 (佐賀県文化財調査報告書第46集): 242—255.
8. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart: 429—597.
9. 宮本博人, 1926: 肥前国北高来郡有喜村字六本松貝塚より発掘せられたる人骨に就いて。人類学雑誌, 41: 561—582.
10. 内藤芳篤, 1971: 西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌, 79: 236—248.
11. 内藤芳篤, 1981: 弥生時代人骨。人類学講座 5, 日本人 I, 雄山閣, 東京, 57—99.
12. 内藤芳篤, 松下孝幸, 1981: 弥生時代人骨。季刊人類学, 12(1): 27—37
13. 牛島陽一, 1954: 佐賀県脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究。人類学研究, 1: 273—303.
14. 財津博之, 1956: 山口県土井ヶ浜弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。人類学研究, 3: 320—349.

VI 長崎県・有喜貝塚の貝類より見た考察

山本愛三

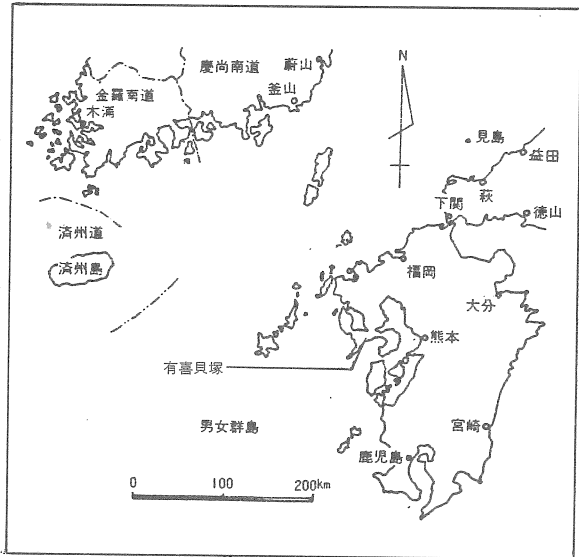
I 序

昭和58年度、災害復旧緊急調査により、有喜貝塚の調査が行われ、その折の資料分析の依頼を受けた。直接調査を行い、この機会を与えて下さった、長崎県諫早市社会教育課主事、秀島貞康氏をはじめ関係諸氏に深甚の謝意を表するものである。

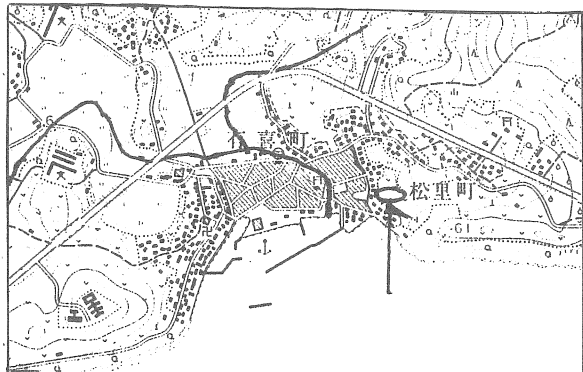
II 本遺跡の所在と発掘概況

本遺跡は長崎県諫早市松里町六本松にあり、昭和58年7月～8月にかけ長崎県諫早市教育委員会によって調査が行われた。本遺跡の位置は第35図、第36図に示す通りである。発掘現状図は第37図に示すA、B、C、Dの4区である。本資料としたものは、各遺構断面図、第38図、第39図、第40図、第41図に示す通りである。包含する土器は縄文中・後期と断定された、発掘の詳細は本書3頁～61頁にまとめられている。

本遺跡は、安山岩・凝灰岩を含む火山性土壌台地（標高約15m）に立地しており、砂し上に立地しているのではない。同形の台地は東側からもはり出し、北北東から流れ込む有喜川河口をはさみこむようにはり出している。現有喜町は河口周辺に発達しており、何度かの埋め立ての後、今日に至っている。有喜町の北、鶴田町と間には田園が開け、複雑な氾濫原の様相を呈している。本遺跡周辺には、上原貝塚、川床余木貝塚、上原古墳、木秀古墳が知られている。



第35図 有喜貝塚位置図



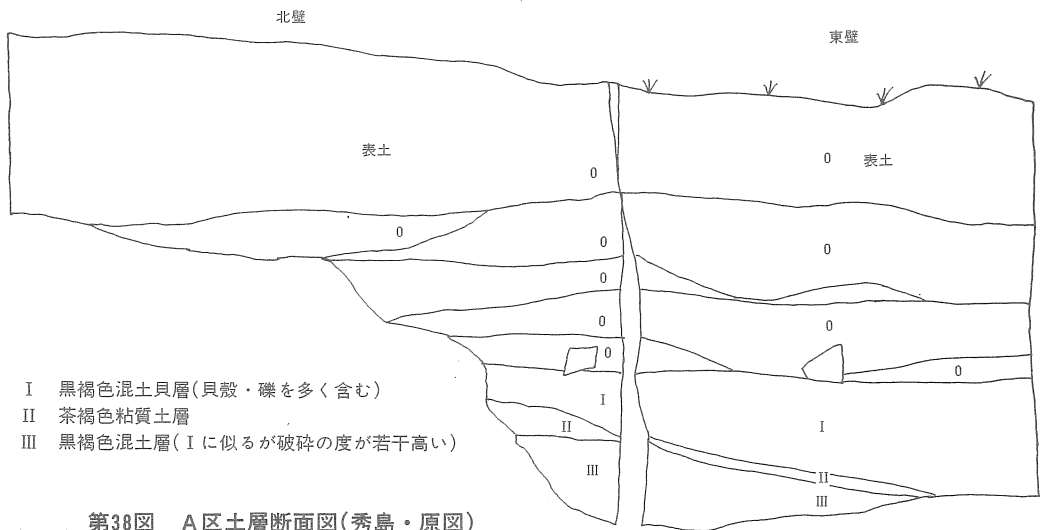
第36図 有喜貝塚周辺位置図 (1/25,000)

III 資料収集の場所と出土状況

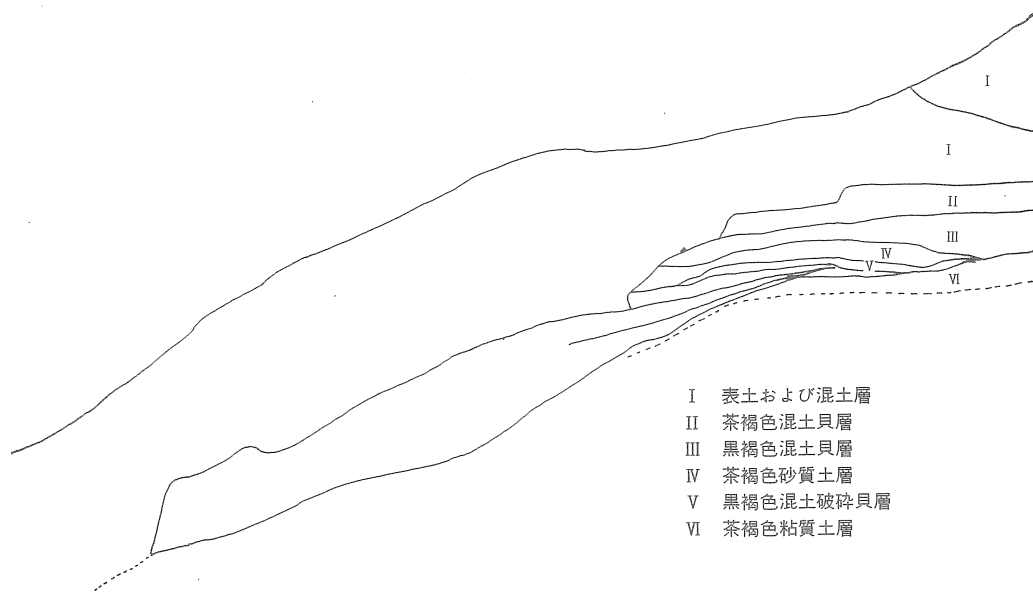
第37図に現状図，第38～42図に遺構断面と資料収集の場所を示す。



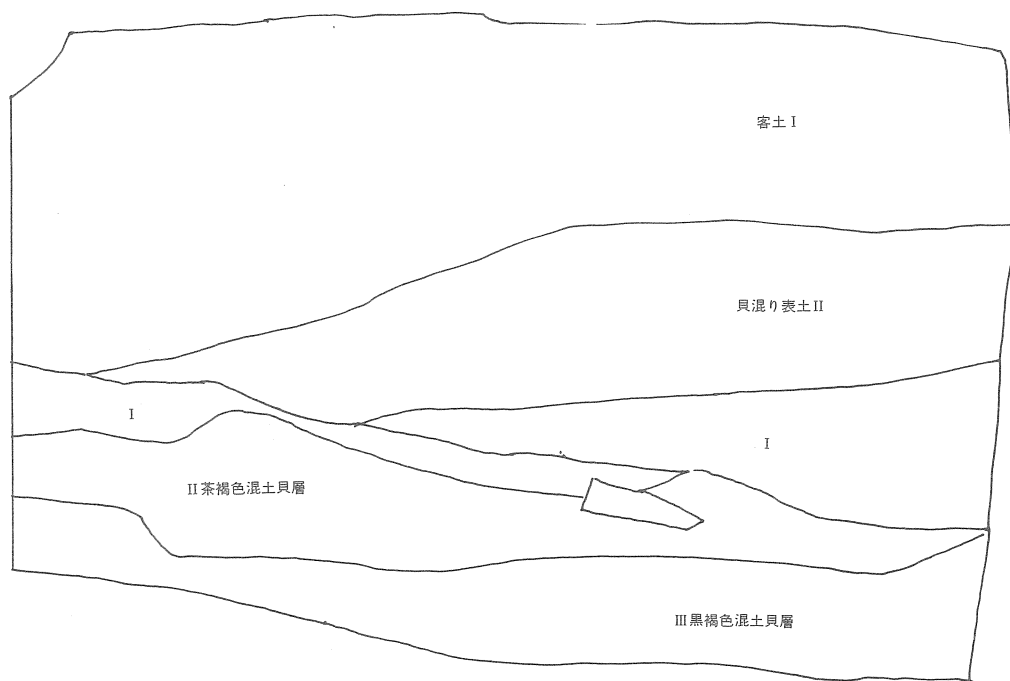
第37図 有喜貝塚地形図及び調査区設定図(秀島・原図)



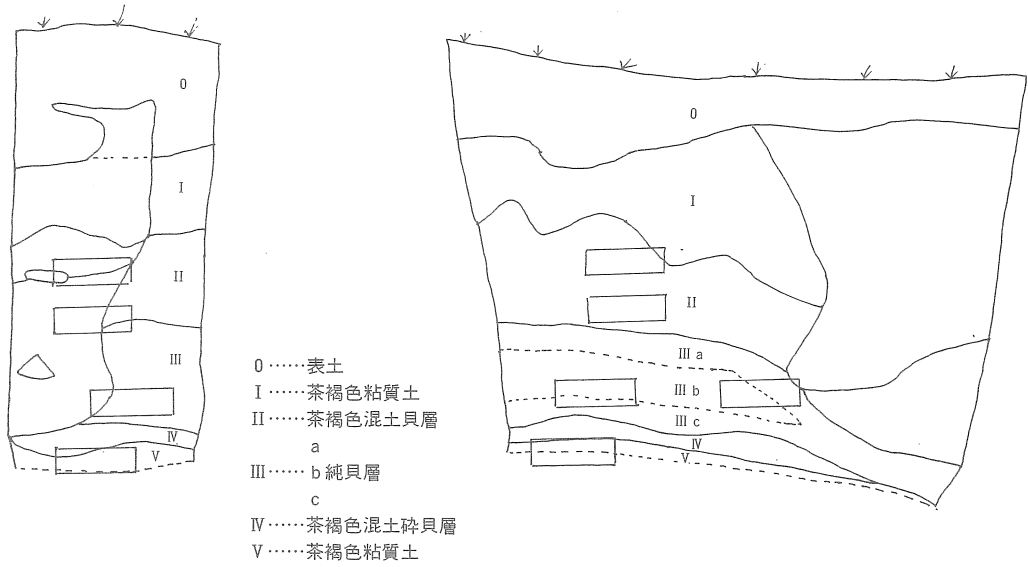
第38図 A区土層断面図(秀島・原図)



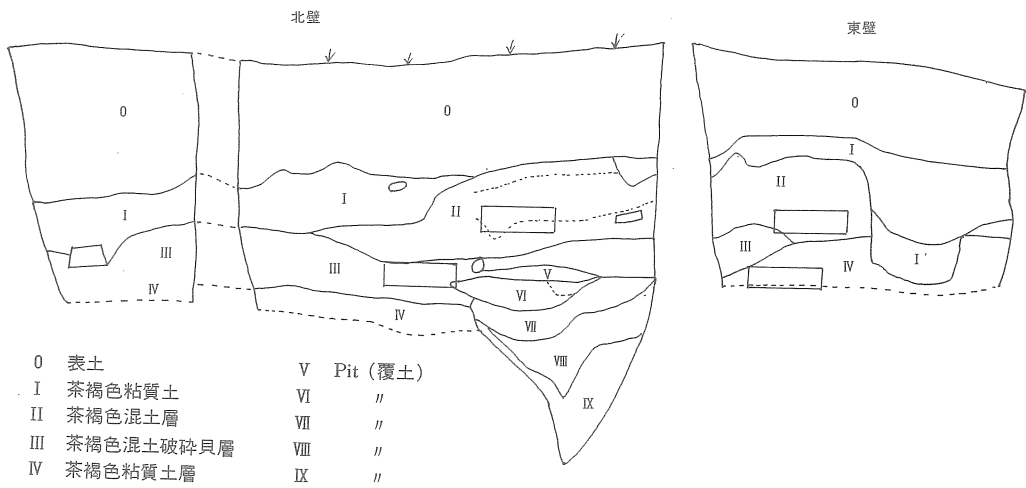
第39図 B区西壁土層断面図(秀島・原図)



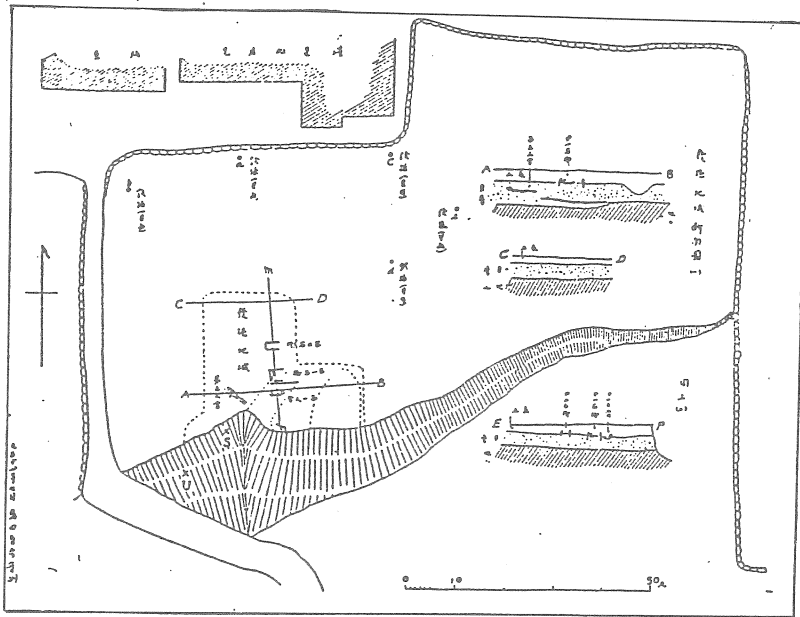
第40図 B区北壁土層断面図(原図・秀島)



第41圖 C区土層断面図(原図・秀島)



第42圖 D区土層断面図(原図・秀島)



第43図
大正14年発掘現状図
浜田，小牧，島田
(1924. 原図)

IV 今回発掘された有喜貝塚の貝類

今回の発掘により確認された貝層は遺跡の一部にすぎないが、このうち貝類の資料として抽出されたのは第37～42図に示されたもので、資料はすべて泥土のままもちかえり、秀島氏等により1mmメッシの篩ですべて水篩され、微小な破片にいたるまで抽出され、筆者に分析を依頼された。資料をトレンチ別、層別、種類別に個体数を計出し分析したのが第19表である。二枚貝は左右ばらばらに出土するので左片，右片の多い方を個体数とした。第19表より考察すると、陸産貝については、食料の対象とは考えられない微小種まで含まれており、貝塚として堆積した当時棲みついたものと考えられる。更に各トレンチ，各層，共通して現地形では採集できない内湾性もしくは砂泥底性貝類がかなりの%で発見されることでこのことは、現在と遺跡形成当時の地形がかなり，異なっていたことを暗示するものと考えられる。また，本遺跡が，砂し上に形成されたものではなく，かなりの標高の台地上にあること。周辺遺跡（前述）がほぼ同じ標高に散在していること，内湾性貝類のしめる%がかなり高いこと（平均24.14%）は何を意味するのか。現地形で干拓が行われ，標高0m地域が現在の田畠になっていると仮定しても，遺跡の標高や，内湾性貝類の産出量を満足させるものではない。筆者は，縄文前期の海進の折，全国的に海水面が5～6m現在より上昇し，B.C2300年頃，現海面に接近したという，多くのデータから，本遺跡が縄文中期後半から縄文後期の遺跡であることより，現海面より海面が高かったのではないかと考えている。今，遠藤（1936）の公式より計出すると1.5mとなり，現地形の標高1.5m線に当時の海岸線があったことになり，散在する遺跡の標高と内湾性貝類の産出量を説明するにたる内湾，もしくはラグーンが形成され，湾口にあたるところにデルタが発達し，これが後に，何回もの埋め立て工事を経て，現有喜町の基盤を形成したと考えている。

第19表 長崎県有喜貝塚の貝類を中心とする組成表

種名	発掘区層位										岩礫性	内湾性	陸性
	A	B	C		D		E						
	III B.S.	V B.S.	II B.S.I	II B.S.II	III B.S.I	III B.S.II	IV B.S.I	IV B.S.II	V B.S.				
1. <i>Liolophura japonica</i> (LISCHKE, 1873) ヒメウツガイ	2 (0.4)										○		
2. <i>Monodonta labia confusa</i> (TAPPARONE-CANEFRI, 1874) イシダタミ	83 (15.4)	8 (13.6)	27 (6.4)	86 (18.2)	145 (12.0)	127 (20.3)	1 (8.3)	7 (2.8)	49 (25.1)	24 (12.6)	○		
3. <i>M. neritoides</i> (PHILIPPI, 1850) クロツケガイ				1 (0.2)	16 (1.3)	52 (8.3)					○		
4. <i>Chlorostoma argyrostoma lishkei</i> (TAPPARONE-CANEFRI, 1874) クロツケガイ		1 (1.7)	17 (4.0)	52 (11.0)	38 (3.2)	30 (4.8)		10 (3.2)	2 (1.0)	6 (3.2)	○		
5. <i>C. nigricolor</i> (DUNKER, 1860) クマノコガイ	11 (2.0)		4 (0.9)	16 (3.4)	123 (10.2)	20 (3.2)		8 (3.1)		5 (2.6)	○		
6. <i>Omphalium pfeifferi carpenteri</i> (DUNKER, 1882) オモコシタカカンガラ	154 (28.6)	13 (22.0)	87 (20.5)	167 (35.3)	414 (34.3)	166 (26.6)	3 (25.0)	51 (20.0)	21 (10.8)	55 (28.9)	○		
7. <i>O. vesticus</i> (GMELIN, 1791) コシタカカンガラ	8 (1.5)			3 (0.6)	13 (1.1)	4 (0.6)	1 (8.3)	1 (0.4)		2 (1.1)	○		
8. <i>O. nigerrima</i> (GMELIN, 1791) ヒメウツガイ	1 (0.2)			3 (0.6)		5 (0.8)			9 (4.6)	2 (1.1)	○		
9. <i>Trochus spengleri</i> (ROTA, 1860) ウスイチモンシ				1 (0.2)	1 (0.1)					1 (0.5)	○		
10. <i>Marmorostoma stenogyrum</i> (P. FISCHER, 1873) コシダカササエ										2 (1.1)	○		
11. <i>Batillia cornutus</i> (LIGHTFOOT, 1786) ササエ	16 (3.0)	14 (23.7)	24 (5.6)	15 (3.2)	29 (2.4)	12 (1.9)	2 (16.7)	21 (8.3)	13 (6.7)		○		
12. <i>Linella coronata corensis</i> (RÉCLUZ, 1853) スガイ	25 (4.6)		56 (13.2)	7 (1.5)	1 (0.1)	14 (2.2)	3 (25.0)	3 (3.5)	15 (7.7)	7 (3.6)	○		
13. <i>Astrarium haematragum</i> (MENKE, 1829) ウツウスガイ			1 (0.2)							8 (4.2)	○		
14. <i>Hemineria japonica</i> (DUNKER, 1860) アツガイ	1 (0.2)			1 (0.2)	4 (0.3)	2 (0.3)			1 (0.5)		○		
15. <i>Littorina brevicula</i> (PHILIPPI, 1844) チマキガイ	2 (0.4)		2 (0.5)	2 (0.4)	1 (0.1)	5 (0.8)	1 (8.3)	9 (3.5)	4 (2.1)	26 (13.7)	○		
16. <i>Cerithiidae rhizophorum</i> (A. ADAMS, 1855) フツヘチマリガイ						10 (0.8)	3 (3.4)					○	
17. <i>Batillaria cuningii</i> (CROSSE, 1862) ホソウニナ			1 (0.2)	1 (0.2)								○	
18. <i>Batillaria multiformis</i> (LISCHKE, 1869) ウ	15 (2.8)	4 (6.8)	14 (3.3)	3 (0.6)	11 (0.9)	15 (2.4)		2 (0.9)		4 (2.1)		○	
19. <i>Amalthaea conica</i> (SCHUMACHER, 1817) キクススミ	21 (3.9)	2 (13.4)	6 (1.4)	3 (0.6)	48 (4.0)	8 (1.3)				5 (2.6)	○		
20. <i>Reishia luteostoma</i> (HOLTEN, 1803) タリフレイシガイ										1 (0.5)	○		
21. <i>R. bronni</i> (DUNKER, 1860) レイシガイ	6 (1.1)	2 (3.4)	1 (0.2)	9 (1.9)	17 (1.4)	2 (0.3)					○		
22. <i>R. clairgera</i> (KISTER, 1860) イボニシ	11 (2.0)	3 (5.1)	9 (2.1)	1 (0.2)	1 (0.1)				1 (0.5)		○		
23. <i>Japentheria ferrea</i> (REEVE, 1847) イソニナ						5 (0.8)				5 (2.6)	○		
24. <i>Saigayarea virescens</i> (REEVE, 1884) カリガネエガイ	1 (0.2)			27 (5.7)	3 (0.2)	19 (3.0)						○	
25. <i>Barbatia lima</i> (REEVE, 1844) エガイ	52 (9.6)		4 (0.9)	1 (0.2)		1 (0.2)		3 (1.2)			○		
26. <i>B. stearnsi</i> (PILSBRY, 1895) ハナエウガイ	1 (0.2)										○		
27. <i>Tegillarca granosa besenensis</i> (SCHENCK et REINHARDT, 1938) ハイガイ		5 (8.5)	12 (2.8)	5 (1.1)				4 (1.6)		6 (3.2)		○	
28. <i>Septifer virgatus</i> (WIEGMANN, 1837) ムラサキインコガイ						1 (0.2)					○		
29. <i>Spondylus cruentus</i> (LISCHKE, 1868) チリホタン	1 (0.2)							1 (0.4)			○		
30. <i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG, 1793) マカキ	108 (20.0)	2 (3.4)	144 (33.9)	6 (1.3)	180 (14.9)	3 (1.3)	1 (8.3)	123 (50.4)	80 (41.0)	20 (10.5)		○	
31. <i>Cyrtina sinensis</i> (GMELIN, 1791) オキレンシ	15 (2.8)	1 (1.7)	13 (3.1)	48 (10.1)	150 (12.4)	107 (17.1)				3 (4.2)		○	*
32. <i>Anomalocardia squamosus</i> (LINNÉ, 1758) シロヤガイ			3 (5.1)									○	
33. <i>Merisca coitabulata</i> (DESHAYCS, 1854) サヒシラトリガイ										1 (0.5)		○	*
34. <i>Cyclophorus herklotsi</i> (MARTERN, 1861) ヤマガエシ	2 (0.4)			1 (0.2)									○
35. <i>Procyclus campanulatus</i> (MARTENS, 1865) ヤマガエシ				2 (0.4)									○
36. <i>Nakadaella micron</i> (PHILSBRY, 1900) ヒシシヤマガエシ			3 (0.7)	5 (1.1)					1 (0.5)				○
37. <i>Semissulcospina libertina</i> (GOULD, 1859) ウツニナ			1 (1.7)				1 (0.2)						○
38. <i>Zaplex stimpsoni</i> (A. ADAMS, 1868) スウヒダキガイ	1 (0.2)			1 (0.2)	1 (0.1)								○
39. <i>Allopeas kyotoense</i> (PILSBRY et HIRASE, 1904) オガキウツガイ					5 (1.1)								○
40. <i>Urastrophomys doentzii</i> (REINHARDT, 1877) ウラジロヘッコウ				1 (0.2)									○
41. <i>Trishoplia cumenes</i> (WESTERLUND, 1883) キユウシウシロマイガイ	2 (0.4)												○
42. <i>Anthocardia crassispina</i> (A. AGASSIZ) ムラサキウニ	*			*	*	*	*	*	*	*		○	
合計 () は %	539	59	425	473	1206	625	12	254	195	190			
岩礫性貝類 %	73.2	72.8	55.9	77.7	70.6	72.6	91.6	47.1	59.0	79.3			
内湾性もしくは砂泥性貝類 %	25.8	25.5	43.3	19.0	29.2	27.2	8.3	52.9	41.0	20.8			
陸産性(淡水性も含む)貝類 %	1.0	1.7	0.7	3.3	0.1	0.2	0	0	0.5	0			

次に各トレンチの層別出土状況について分析する。

第37図に示すA, B, C, D, Eの4トレンチを設定, 発掘が進められたが, 秀島氏等の土器の分析結果は第20表の様になる。

	A	B・E	C	D
I	阿高, 御手洗A, 弥生		阿高, 御手洗A 貝殻条痕	南福寺, 出水, 福田KII, 鐘ヶ崎 北久根山, 貝殻条痕, 弥生
II		阿高, 南福寺, 出水 市来, 磨消縄文	阿高, 坂の下, 南福寺, 出水 中津, 福田KII, 貝殻条痕, 弥生	阿高, 坂の下, 南福寺, 出水, 福田KII 鐘ヶ崎, 御手洗A, 市来, 貝殻条痕
III		阿高系, 南福寺, 出水 磨消縄文	阿高, 南福寺, 出水	阿高, 南福寺 出水, 御手洗A
IV		阿高	阿高, 坂の下, 南福寺, 出水 市来, 北久根山, 貝殻条痕	
V		阿高, 坂の下, 南福寺 出水, 鐘ヶ崎, 北久根山		

第20表 有喜貝塚層別土器出土状況表(秀島による)

第20表中, B, Eトレンチは土器の出土状況が, II~IV層までほとんど変わらないことに注目したい。このB, E調査区は第37図, 第39図でも示されるように傾斜地形に位置することと, 浜田等(1924)により発掘された。発掘現状に近いことから, 自然の土砂崩れ等による攪乱や, 大正14年の発掘の折, 発掘廃出土の捨て場であったのではないかと推定され, 今回人骨を担当した松下氏も人骨の出土状況から同様の考えであると聞く, いずれにしても, B, EトレンチはI~V層までが攪乱層であると断定せざるを得ない。

Aトレンチはかなりの深さまで攪乱層がつづき, I, II, IIIが出現する。この層も第20表より各層を区別する根拠は発見できない。筆者は, 浜田等(1924)の発掘現状図第43図と, 今回の第37図が符合しないところから, 浜田原図(×s)付近に現在の道路が作られ, ×u付近に, Aトレンチが符合するのではないかと考えられ, ×uを含む崖地帯は造成され平坦に姿を変えているのではないかと考え, A区そのものが造成による二次堆積ではないかと考えている。

次にCトレンチであるが, 第41図, 南壁図の攪乱層は第37図, C区の西南のかどの点線で示した場所に当たり, 第43図(浜田原図)の旧発掘地点の東端に当たると考えられ, II, III層も土器の出土状況から見ると一部二次堆積の可能性が強い。

この様に考えると, 一次堆積資料として使えるのは, C区のIII, IV層とD区, II~III層であるとの結論に達せざるを得ない。更にこのうち, C区, IV層の貝類の抽出個体数が少ないので他と比較するのは問題がある。今, C区のIII-B, S-I層と, C区, III-B, S-II層を比較すると内湾性貝類と岩礁性貝類の出土%の間には4.0%の差しかない。またD区のII, III層の間にも大きな差はない。したがって, これら層が形式された当時は, 地形的変化がさほどなかったと推定される。

各トレンチが, かなりの攪乱を受けていると考えられるのに各層の内湾性貝類と岩礁性貝類の出土%が接近していること, 内湾性貝類の出土しない層がないことから, 現地形で存在しない, 内湾が遺跡形成当時は存在していたと断定せざるを得ない。

V 過去の記録による自然遺物

〔貝類〕

1. 浜田・島田・小牧 (1924) に黒田徳米氏, 同定により, 次の28種が記録されている。
オオキララガイ, カリガネガイ, マルサルボウ, ハイガイ, ヒオオギ, カキ, オキシジミ, ハマグリ, フジナミガイ, イソシジミ, アワビ, イシダタミ, クロツケガイ, クマノコガイ, コシダカガンガラ, バテイラ, オオコシダカガンガラ, サザエ, スガイ, タマキビ, フトヘナタリ, ウミニナ, オオヘビガイ, キクスズメガイ, ミガキボラ, レイシガイ, テングニシ, クボガイ
2. 桑山竜進 (1936) によると以下の29種が記録されている。
アワビ, イソシジミ, イシダタミ, ウミニナ, オキシジミ, オオヘビガイ, オオキララガイ, カキ, カリガネガイ, キクスズメガイ, クボガイ, クロツケガイ, クマノコガイ, コシダカガンガラ, サザエ, スガイ, タマキビ, テングニシ, ハイガイ, ハマグリ, バイ, バテイラ, ヒオオギ, フジナミガイ, フトヘナタリ, マツバガイ, マルサルボウ, ミガキボラ, レイシ
3. 今回の調査, 第19表に示した42種を記録した。
浜田 (1924) にあって桑山 (1936)* にはないものは, オオコシダカガンガラ, 1種である。逆に桑山 (1936) にあって, 浜田 (1924) にはないものは, バイとマツバガイの2種である。
浜田 (1924) にあって, 筆者にはないものは, オオキララ, マルサルボウ, ヒオオギ, ハマグリ, フジナミガイ, アワビ, バテイラ, オオヘビガイ, ミガキボラ, テングニシの10種, 桑山 (1936) にもないものは, マツバガイ, バイの2種である。
筆者にあって両氏にはないものは, ヒザラガイ, ヒメクボガイ, ウズイチモンジ, コシダカサザエ, ウラウズガイ, アマガイ, カワアイ, クリフレイシ, イボニシ, イソニナ, エガイ, ハナエガイ, チリボタン, イチヨウシラトリ, ヤマトニシ, アツブタガイ, ミジンヤマタニシ, カワニナ, スグヒダギセル, オカチヨウジガイ, ウラジロベツコウ, キュウシュウシロマイマイ, シオヤガイ, ムラサキインコ, の24種である。
この相異は, 資料の抽出法の相異によるところが大きいと思われる, 筆者の資料はブロック抽出を行い, 更に1mmの篩で篩出しをしているので, 微小な, 非食料貝を含まれているのに対し, 前記, 両氏は, 任意抽であり, 表層採集も含まれているのではないかとと思われる。いずれにしても, 筆者の記録に前記アンダーラインのものを加えると, 本遺跡として, 54種が記録されたことになる。いずれも, 発見されて当然だと思われる貝である。バテイラに関しては, 本来, 太平洋岸の種で, 九州西岸ではごく希にしか発見されない種である。桑山 (1936) には, オオコシダカガンガラのように多数発見されるものの記録がなく, バテイラの記録があるのは分類ミスと思われる。

VI 本遺跡形成時の自然環境の復元

出土貝類について、炭素の同位元素による絶対年代を計測していないので正確なことは言えないが、土器年代より推定し、遠藤（1967）の公式に入れると、当時は縄文前期の海進の余波をうけ、現在より1～1.5m海水面は高かったと考えられる。これがなかったとしても、当時の河川堆積物は現在ほどではなかったはずで、湾入は深く、内湾をかかえた地形であったと考えられる。

このことは、多くの字名にそれを裏付ける地名がのこされていることと、今回出土の貝がそれを物語っているといえる。流入する川には、カワニナが棲み、泥底には、オキシジミ、ハイガイ、サビシラトリが、多数、生棲し、内湾奥の泥底にはシオヤガイが、また、川水の影響を受ける塩度の低い岩礫には、マガキが多数生息し、岩の下には、カリガネエガイが、干潮帯にはフトヘナタリやホソウミニナが生棲していた。以上のようなかなり広い、内湾をかかえ、外洋は、ほとんど岩礁海岸であったと思われ、干潮帯の岩礁には、ヒザラガイ、イシダミ、クロツケガイ、オオコシダカガンガラ、スガイ等が生息し、干潮線下には、サザエ、バイ、テングニシ、等が生息していると考えられ、本遺跡をのせる台地の南側も、埋め立て工事のため崖を削ったと思われ、等高線の延長は現河口近くまで、はりだしていたと思われる。

参 考 文 献

- 文化庁文化財保護部（1976）： 全国遺跡地図長崎県，30
遠藤邦彦（1967）：日本沿岸の過去二万年間の海水位変化，考古ジャーナル(6)，6～9
浜田耕作・小牧実繁・島田貞彦（1924）：肥前国有喜貝塚発掘報告書(上)，人類学雑誌，41巻1号，1～14
———（1924）：肥前国有喜貝塚発掘報告（下） 人類学雑誌，41巻2号，79～93
桑山竜進（1936）：橘湾沿岸における史前遺跡について，長崎談叢
酒詰仲男（1960）：日本縄文石器時代食料総説，土曜会
山本愛三（1962）：五島岐宿寄神貝塚に関する考察，五島遺跡調査報告書P.42～51
———（1973）：（五島）江胡貝塚の貝類，曾畑式土器に関する研究，縄文文化研究会，P.70～72
———（1974）：熊本県尾田貝塚の貝類，曾畑式土器に関する研究，縄文文化研究会
———（1975）：対馬・住吉平貝塚の貝類，長崎県文化財報告書第20集，P.4～5
———（1976）：志多留貝塚の貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元，対馬の生物，長崎県生物学会
49～57
———（1977）：壱岐・原ノ辻遺跡を中心とする壱岐の先史生物，壱岐の生物，81～87
———（1978）：長崎県串島貝塚の貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元，長崎県文化財調査報告書第
51集 137～146

VII ま と め

以上、有喜貝塚出土の文化・自然遺物について記述を行ったが、ここで若干の考察を述べてまとめとしたい。

本遺跡出土の縄文式土器は、出土量に対して、器形・文様構成等を十分に簡明できないため本書では文様およびその施文手法を中心に14類に分類した。

I類は、従来阿高式土器と呼称されている。指頭などにより太形凹線文を雄渾に描く一群を代表させた。I類の中でも、古手と思われるものは、攪乱が著しかったB・E区に多出する傾向にある。II類は、文様の範囲が器面全体におよぶとされる阿高II式土器を母体として成立した坂の下I式土器と後続するII式土器^{註17}を含めてII類とした。これは筆者にI式とII式の分離ができなかったためであり、かつ施文手法の上からは分離し得ないことによる。即ち、施文具として用いられているものには、へら状工具と指頭および爪先による施文が多い。文様は浅い凹線文や、凹点文においては中央に段がつくものが多く認められ、またへら状工具で刺突して凹点文を施したもので認められる。このII類としたものは、先のI式土器、II式土器を包含しているため、III類と一部重複していると考えられる。III類は南福寺式土器とされるもので、へら状工具により施文する例が多く、また隆帯の貼付や、口縁部を肥厚させるなどの要素が見い出せる。III類の中にも連点文を施文する例が存在する訳であるが、ここではII類の範疇に含めた。IV類は、出水式土器に比定されるもので、施文具は細い棒状工具あるいはへら状工具の先端を使用している。そのためIII類までの凹線文が認められないものである。口縁部は肥厚させ、文様帯として施文する。中には粘土紐を撚り合せて橋状把手を作ったり、口縁または胴部との境界に隆帯を貼付し、刺突あるいは押圧により刻みを施文するものもあり、II類、VIII類との関連が看取される。V類、VI類は瀬戸内系土器群で、数量的には少ない。VII類は鐘ヶ崎式土器に比定されるもので、磨消縄文系の土器群である。本遺跡出土例には、擬似縄文化したものや、沈線文のみのものが見られる。器形は頸部が少し長くなって間延びした土器も見受けられる。VIII類は御手洗A式に比定されるもので、連続刺突の爪形文施文の特徴をもつ。本遺跡出土例は連続爪形文が端正に施文されるものは少なく、代わって施文具に貝殻を利用したことが多い。施文具の作り方によって、2段の刺突を行ったように見える例がある。技法としては刺突、押し引きを多用し、中には口唇部または口縁部に竹管状施文具で刺突、押捺した土器も存在する。IX類は市来式土器に比定されるもので、口縁部を三角形状に作り、4つの山形口縁をなす特徴をもつ。口縁部外に施文する例は認められない。三角形状に肥厚させた口縁部の上・下縁に連続爪形文、中央に始・終点となる刺突をもつ2本の平行線文を施文するものや、平行線間に貝殻腹縁により施文する土器がある。X類は北久根山式土器に比定されるものである。明確な層位出

土のものは少ない。表土・攪乱層出土の中には前川威洋氏の第二型式^{註18}に相当する粗製深鉢形土器が見られる。XI類は貝殻条痕文土器である。器形は単純な深鉢形を呈す。底部から外反気味に立ち上がる胴部は口縁部付近で内湾気味に外反もしくは直行して終わるという特徴をもつ。XI類土器の共伴関係であるが、II～IV類は滑石粉末を混入する粗製土器が存在することから、これらに共伴する可能性は少ない。次にV～X類のうち、X類には粗製深鉢形土器が共伴することから、VII～IX類に共伴するものと思われる。VII類は型式不明土器群。VIII類は無文土器群。この中には、口唇部が小波状をなし、かつ滑石粉末を混入するものが多いことからII～IV類に伴うものと考えられる。XIV類は脚台部、底部を一括して扱った。

以上の土器群と大正14年調査時出土土器群を纏めると下表のようになる。

第21表 各調査区出土土器一覧表

調査区・層	類	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	弥生式土器	
A	I	○	○					○								○	
	III	○						○									
	B	II	○		○	○					○			○	○		○
		III		○	○	○									○	○	○
		IV	○														
C	V	○	○	○	○			○			○		○			○	
	I	○							○			○					
	II	○	○	○	○	○	○					○	○		○	○	
	III	○		○	○									○	○	○	
	IV	○	○	○	○					○	○	○	○				
D	I			○	○		○	○			○	○	○	○	○	○	
	II	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	
	III	○		○	○				○					○	○		
	Pit			○	○									○			
E	III	○	○	○		○				○				○		○	
	大正14年	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○	

これら14類の中、XII～XIV類を除いた11類の編年は次のようになる。

- I期 I類 縄文中期
 II期 II～V類 縄文後期前半
 III期 VI～XI類 縄文後期中葉

I期の貝層は確認できず、II・III期のものと混在して出土する。II期・III期は、貝塚形成の主体を占めるもので、II期の土器群はC区・D区の最下層から検出され、D区においてはその上層にIII期の土器群が包含されている。A区・B区・E区は攪乱が認められるため除外する。が、A・B・E区において阿高式土器の古い段階のものが出土する傾向にあり、貝塚形成の在り方によるものであろう。C区IV層は最下層においてIII期の土器群を混じえている。III層が純貝層でII層にIII期の土器が出現していないこと、また攪乱の状況が認められないとの山本氏の報告より勘案すれば、何らかの理由で沈下・混在したと見るか、あるいはII期とIII期の土器群がかなり近い時間帯を有していたとの結論に達せざるを得ない。

さて、II期の土器群は系統的に把握がなされているが、III期については各地域を代表する土器群であるためか、不分明な点が多い。まず、VIII類の御手洗A式土器に比定される土器群は、

出水式土器から導き出されるものである。この類は1型式だけで遺跡の主体を占めることは少なく、鐘ヶ崎式土器註20に共伴するとされている。しかし、大道端遺跡註21、荒田比貝塚註22では鐘ヶ崎式土器の共伴がない。また逆に鐘ヶ崎式土器が主体をなす遺跡では御手洗A式註23が共伴しないという現象が認められる。渡鹿貝塚註24、出津遺跡註25などが挙げられる。しかし、本遺跡では共伴関係にあるため、両型式の土器は共伴するものと考えておきたい。このVII類には、IX類、X類が共伴すると考えられる。山鹿貝塚註26、渡鹿貝塚註27、出津貝塚註28、白浜貝塚註29、春日町遺跡註30、野口遺跡註31などで2者あるいは三者共伴関係で検出されている。施文のモチーフを見ると草野貝塚出土註32の市来式土器口縁部内面には蛇行状文様が施され、これは指宿式からの系譜を引くとされている。同文様は、渡鹿貝塚の鐘ヶ崎式系土器や本遺跡で大正14年出土した市来式土器、出津遺跡出土の市来式+北久根山式土器の折衷土器などに施文されている。また白浜貝塚では鐘ヶ崎式+北久根山式の折衷土器が検出され、3者が時間的・空間的に近接したものであることを示している。このように、本遺跡III期の土器群は複雑な様相を呈していると言えよう。

なお、図版10に表土および攪乱層出土の土器群を掲載した。注目されるのは、阿高式土器の前に位置付けられる並木式土器が見られることである。大正期の調査でも確認されておらず、僅か数片の出土であるが貴重なものである。胎土には滑石を多含する。外には阿高式系土器が最も多く磨消縄文系、北久根山式系、市来式系などの縄文後期土器や、弥生中期の土器が認められる。

骨角牙器はII期・III期に伴出するものの、表土・攪乱層からの出土が多い。中には山鹿貝塚註34、天神山貝塚註35で確認された、ヤス作出の際の残滓も出土しており、同様の製作手法を示すものとして注目される。また骨製の銚かたと推される刺突具も出土しており、西北九州の漁撈の在り方も問題となろう。

石器は、該期の他遺跡のように石鏃、石銚、石鋸などが検出され、大形魚類への刺突具として使用されたのであろう。また搔器類も多く、その処理・解体に供されたものと思われる。搔器・石核の中には施刃後、意図的に折断した例があり注目される。類例としては出津遺跡にも認められている。本遺跡では石ノミが2点、外に石斧未製品が検出された。大正期には石ノミ1点、小形扁平の片刃あるいは両刃の石斧（報告では石鑿と表記）が9点、石斧15点が確認されている。前川氏の指摘註36の如く、扁平片刃石斧は「木材の加工具としての性格が強く、とくに海岸部では舟の作成に使用されたものであろうし、また同時に漁撈用の舟の発達も推測される。」と考えられた。この扁平片刃石斧は、上記の石ノミ、石斧とセットをなすものと考えられ、時期的には各地域の土器の混淆が著しいIII期の所産と推測される。ヌカシ遺跡註37では中期阿高式に伴って扁平片刃石斧2点、出津遺跡で1次調査で石ノミ1点、2次調査で北久根山式に共伴して扁平片刃石斧が2点（外に近似するもの1点）、西之園遺跡註38で石ノミ1点、小形の扁平両刃石斧1点註39が検出されている。また鎌崎海岸遺跡においても3種の石斧が採集されており、木材加工の用に供されたと推測される。外には石庖丁形石器が検出された。III期の層より検出されたもの

で両刃をなす。大正期にも1個確認されている。同様の例は、ヌカシ遺跡で頁岩製のものが中期阿高式に伴って検出されている。草野貝塚^{註40}からは石質不明であるが「磨製薄石板」として両刃のものが3例、また若宮遺跡^{註41}からは、西平、御領式に伴って石質不明のもの2例が検出されている。用途については不明であると言わざるを得ないが、本遺跡の2例が共に砂岩製であるところからすれば、骨角器等の整形あるいは擦り切りに使用されたものであろうと推測される。

石錘および軽石製の浮子も僅かではあるが検出されている。魚骨の分析を経ていないため断言はできないが、大形の魚骨に混って、小形の魚骨が検出された。ブロック・サンプルの水洗によって検出したのであるが、これらは石錘・浮子を使った定置網の存在を考えなければ捕獲が困難な程小形の魚種である。

以上、若干の考察を行って稿を終わることとするが、有喜貝塚はI期縄文時代中期に貝塚が形成され、II期およびIII期縄文後期中葉にその盛期を迎えた貝塚である。また成立の背景には、一方では従来の動植物の狩猟・採集と他方では対馬暖流型漁撈文化^{註42}の影響を色濃く受けた、西北九州の典型的な遺跡と評価されよう。

- 註17 田中良之 「中期・阿高式系土器の研究」 『古文化談叢』 第6集 1979
 田中良之 「阿高式土器」 『縄文文化の研究』 1981
- 18 前川威洋 「九州後期縄文土器の諸問題」 『九州縄文文化の研究』 所収 1979
- 19 前掲註18に同じ
- 20 前川威洋 「縄文後期文化—九州—」 『新版考古学講座』 第3巻 S. 44
- 21 田中良之・宮内克己 「その他の遺物—縄文式土器—」
 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 XIV 1977
- 22 永井昌文外 『荒田比貝塚』 大牟田市教育委員会 1970
- 23 富田紘一 『渡鹿遺跡群発掘調査概報』 1974
- 24 平野敏和氏・中村和正氏のご教示による。
 平野敏和外 『出津遺跡』 外海町教育委員会 1983
- 25 永井昌文外 『山鹿貝塚』 山鹿貝塚調査団 1972
- 26 前掲註23に同じ
- 27 前掲註24に同じ
- 28 正林護・安楽勉 「白浜貝塚」 『福江市文化財調査報告書』 第2集 1980
- 29 河口貞徳 「鹿児島市春日町遺跡発掘調査報告」 『鹿児島県考古学会紀要』 第4号 1955
- 30 賀川光夫外 「宮下遺跡」 『長崎県文化財調査報告書』 第7・9集 1968, 1971
- 31 富永直樹・立石雅文 「野口遺跡」 『久留米市文化財調査報告書』 第28集 1981
- 32 河口貞徳 「草野貝塚発掘報告」 『鹿児島県考古学会紀要』 第1号 1952
- 33 前掲註32に同じ
- 34 前掲註25に同じ
- 35 前川威洋・木村幾多郎 「天神山貝塚」 『志摩町文化財調査報告書』 第1集 1974
- 36 前川威洋 「九州における縄文中期研究の現状」 『古代文化』 第21巻第3・4号 1969
- 37 坂田邦洋 「対馬ヌカシにおける縄文時代中期文化」 『別府大学考古学研究室報告』 第1冊 1978
- 38 池畑耕一・長野真一 「西之園遺跡」 『鹿児島県文化財発掘調査報告書(8)』 1978
- 39 横山順・田中良之 「杵岐・鎌崎海岸遺跡について」 『九州考古学』 No.54 1979
- 40 前掲註32に同じ
- 41 河口貞徳 「鹿児島のおいたち—先史時代—」 『河口貞徳先生古稀記念著作集』 所収 1981
- 42 橘昌信 「石錘—西北九州における縄文時代の石器研究(二)—」 『史学論叢』 第10号 1979